

# 市長としゃべらんで

トーク  
企画

「市長としゃべらんで」第21回目の今回は、映画監督の白羽弥仁（しらは・みつひと）さんと原井市長とのトークセッションの様をお伝えします。白羽監督は、吉野川市と板野町を舞台とした最新作『道草キッチン』を手がけた映像作家であり、地域や日常を丁寧に描く作品で高い評価を受けています。



映画「道草キッチン」  
白羽 弥仁 監督 × 原井 敬 市長



しらは みつひと  
白羽 弥仁 監督

### しらは みつひと 白羽 弥仁 監督のプロフィール

兵庫県芦屋市生まれ。日本大学芸術学部演劇学科演出コースを卒業後、映画やドラマの企画・脚本に携わる。1993年に劇場映画『She's Rain』で監督デビュー。

以来、『能登の花ヨメ』『ママ、ごはんだ？』『みとりし』『あしやのきゆうしょく』など、地域や家族の日常を温かく描く作品を多く手がけてきました。また、外国人女性の暮らしに迫ったノンフィクションの映画化作品『フィリピンパブ嬢の社会学』でも注目を集めました。

現在は映画制作と並行して、大手前大学で映像制作を教えるなど、次世代の育成にも取り組んでいます。最新作『道草キッチン』は、吉野川市と板野町を舞台に「ゆったりと生きる豊かさ」を描いた心温まる作品です。

### 映画監督・ 白羽弥仁の歩み

**市長** 本日はお越しいただきありがとうございます。まずは監督の自己紹介をお願いいたします。

**白羽** 最初の劇場映画を制作したのは1993年です。もう32年前になります。それ以来ずっと映画を作り続けてきました。

出身は日本大学芸術学部です。全国から映画や演劇を志す学生が集まる学校で、私自身も高校生の頃から映画の道を考えていました。

東京の制作会社では長くライターを務め、いわゆる「プロットライター」として物語の核を考え、企画を数多く立てていました。私にとっては修行の時期でした。

現在は大手前大学の非常勤講師としても活動しています。2009年に教え始め、今の大学で3校目です。この15、16年

**市長** フィルムをつなぐところからのスタートとは驚きです。映画づくりの原点を感じますね。

### 吉野川市から 生まれた物語

**市長** 本作に込めた思いをお聞かせください。

**白羽** 今回の作品『道草キッチン』は原作ものではなく、まず吉野川市のさまざまな方にお話をうかがうことから始めました。移住して店を営む方、日本語ボランティアの方、そうした出会いから物語を組み立てました。

で映像を取り巻く環境は大きく変わりました。以前は編集の仕事を一から教える必要がありました。いまの学生はスキルをすでに持っています。YouTube（ユーチューブ）のサムネイル一つを取っても完成度が高い。昔は人物の撮り方が分からず花や犬ばかり撮っていた学生も、いまはインスタで自撮りが当たり前です。選挙広報も含めて、拡散が前提の時代になり

ました。良し悪しは別として、環境の変化を実感しています。**市長** なるほど。今の若い世代は、最初からSNSに触れて育っていますからね。映画の道を志した、決定的なきっかけは何かあったのでしょうか。

から始めるのが王道でしたが、ちょうど学生の自主制作映画からプロになる人が現れ始めた時期でもありました。「自分にもできるかもしれない」と思った全国の映画好き学生の一人が、私でした。昔は8mmフィルムを切つてつなぐところから始めていました。今で言えば、個人で制作するYouTube（ユーチューバー）に近い感覚でした。

